

誌上行学講習会

高佐日焯上人

百界の心理観とは私のつくった心識学でありませんが、十界の心理観については、日蓮大聖人がその著「観心本尊鈔」において説明せられておられます。

「二、十界の心理は日蓮大聖人が其の著「観心本尊鈔」に於て、大体の心理現象を次の如く明らかにして居られる。

「或る時は或る時は平かに、或る時は喜び、或る時は瞋り、或る時は平かに、或る時は貪りを現じ、或る時は癡を現じ、或る時は諂曲なり、瞋るは地獄、貧るは餓鬼、癡なるは畜生、諂曲なるは修羅、喜ぶは天、平かなるは人なり。」

つまり我々の心の地獄とは、腹を立てておこることであることであり、心の餓鬼はむさぼるといふことであること、心の畜生といふのはおろか、これは男女の色情におぼれることを言うのであり、また、諂曲（てんく）といふのはつむじまがり、たかぶったきょう慢な心をさします。喜ぶといふのは満足している状態、平かとは今腹も立てず、悪事も働かずという、普道の安心した淡々とした心をいいます。

「他面の色法においては六道共に之れ有り。四聖は冥伏して現われずとも、委細に之を尋ぬれば之れ有るべし。」（中略）

この地獄から天までは人の顔にあらわれません。嬉しいときは皆顔をほころばして喜んで居る。腹を立てるといさかすごみのある顔色となる。欲ばっている時は目をひからせて欲しい欲しいというひきつた顔になる。おろかになつて居る時はデレデレとだらしなくなると争うときは争うような高まんなとてまいます。つまりは「心内にあれば色外にあらわる」で精神が顔に出て来る。したがって六道迄は顔色を見れば解つてまいりません。しかし四聖の方は冥伏して現われません。心の奥底にあつて見えない状態でありませぬ。「世間の無常眼前に有り。豈に人界に二乗無からんや。」

無常といふのは人の死ぬことであり、物の無くなること、植物の枯れることであり、また、そういふものの終りという事実があり、また、当然無常を感じる筈である。したがって無常といふものの知識をもつもの、悟りをもつもの、即ち二乗が必ずあるわけでありませぬ。

次号に続く